

【二〇一七年度 オムニバス講座「信仰と、〇〇」の概要】

(5月、6月、7月、10月、11月、12月の第2金曜日4限：15:10～16:40)

オーガナイザー…富原眞弓

昨年度の「一神教と多神教」にひきつづき、今年度もキリスト教文化研究所では、真正面から信仰をテーマにとりあげ、六人の講師からなるオムニバス講座を企画してみました。

多神教的な風土のなかで、なんとなく神仏になじんできた多くの日本人にとって、あれかこれかの究極的な選択を迫るとみえる西欧やイスラームの一なる神への信仰は、なんだかとおつきにくく異質なものと思えるかもしれません。むしろ、毎日いやでも耳目に入ってくる現代の政治的・文化的・社会的・経済的な状況をみるにつけ、こうした「ものを突きつめて」つまり「シロクロつけて」考える姿勢じたいが、ゆるやかで自発的な人的交流を阻害する元凶ぐらいに思っているひとも少なくないかもしれません。

けれど一方で、人間の理性や能力ではどうやっても捉えきれないなにか、どれほど科学が発達してもすくいとれないなにかがあつて、じつはそれこそがいちばん大切なものだったりするのではないかと、漠然と感じているひともいるのではないのでしょうか。

どんな人間もなにかに「献身」したくてたまらない。それが人間の本性だから。よってかならず自分なりの

「偶像」をみつけどす。そう言うてのけた哲学者がいます。崇拜の対象はなんでもよい。経済活動でも、人びとの賞讃でも、権力でも、共同体や国家でも、芸術作品でも、学問研究でも、家族や友人への愛情さえも。なかには文句なく価値があるとされているものも含まれます。これらのどこが問題なのでしょう。なんだか気になるなどというかたは、ぜひ、講座にご参加ください。いっしょに考えてみましょう。

本年度のオムニバス（第2金曜日・前期3回、後期3回）は、「信仰と、〇〇」と題して、講師のかたに〇〇を入れていただきました。また、今回はあらたな試みとして、本講座を初めてご担当いただく若手研究者を複数お迎えしました。抑えるべきオーソドックな組み合わせもあれば、思いがけない組み合わせもあります。あたらしい物の見方のヒントがあちこちに詰まっているはずです。皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

【二〇一七年度 オムニバス講座「信仰と、〇〇」の報告】

今回は、初めての試みとして、各回の講師に講義の要約をお寄せいただくようお願いし、いただいた原稿を、以下にそのまま掲載しました。ご参加くださった受講生の皆さまにとっては、どういった講義だったかをお考えいただけますが、もしかもしれません。また、参加なさらなかった皆さまにも、お読みいただくことで、オムニバス講義の雰囲気やすこしでも伝わるならば、とてもうれしく思います。

来学期も新しいオムニバス講座が実施されます。まだ、詳細は決まっていますが、大きなテーマは「芸術」です。演劇、文学、音楽、古典芸能などがとりあげられる予定です。決まりしだい、本研究所のホームページやチラシ等でお知らせします。

第1回 信仰と、真空——あるいは絶望の効用——

富原 眞弓（近現代西欧哲学・本学哲学科教授）

「この病は死に至らず」（ヨハネ福音書 11章）。これは弟ラザロの死を悼むマルタとマリアへのイエスの言葉である。では、「死に至る病」とはなにか。それは「絶望」である、とセーレン・キェルケゴール（1813-1855）は『死に至る病』でいった。絶望には三つの形態がある。

I 絶望していることを知らずにいる状態・自己からの逃走

1 パスカルの「気晴らし」：「人々は、死も悲惨も無知も免れえぬので、それらを考えずにすませて幸せになろうとした」（『パンセ』A133'、ブランシュヴァイクヴァイク版168）

2 ハイデガーの「頹落」：「現存在は自分自身から頹落 *Verfallen* しながら逃避 *Flucht* する」（『存在と時間』

第1部、第1篇、第6章、第40節、538）

3 サルトルの「自己欺瞞」：「mauvaise foi」(『存在と無』第1部、第2章)

II 絶望して自己自身であろうとしない絶望・弱さの絶望

III 絶望して自己自身であろうとする絶すなわち望・反抗↓自己を措定した存在への否定的な承認

この第3段階の絶望に至ってはじめて、そして絶望という名の罪に陥る状態にまで追いつめられてはじめて、逆説的に、救いの可能性が開けてくる。この罪にも3つの段階がある。すなわち、1. 自己の罪について絶望する罪、2. 罪の赦しについて絶望する罪、3. 精霊に逆らう罪(「マタイ福音書」12)である。

絶望は「単独者 *den Enkelt*」にのみかかわるもので、悪であり、苦しみであり、罪であるが、治癒薬でもある。したがって、絶望は「信仰への通路」たりうる。ただし、救いなき無条件の「絶望」を体験するという条件がつく。

「重要なのは、わたしにとっての真理をみいだしこと、わたしがそれのために生き、また死ぬことを欲する理念をみいだしことだ。いわゆる客観的真理とやらをみいだしとして、そんなものがわたしになんの役にたつというのか(キェルケゴール、22歳の「日記」)。換言すれば、主体的・実存的な真理とは単独者にかかわり、信仰へと通じているが、客観的・普遍的な真理とはヘーゲルの集合にかかわるがゆえに、キェルケゴールによれば信仰とはなんの関係もない。

シモーヌ・ヴェイユ(1909-1943)によれば、「魂の本性的な動きのいっさいは、物質的な重力の法則に類する法則に支配されている。恩寵のみが例外をなす」(『重力と恩寵』11)。「重力」とは想像力または膨張する力を、「恩寵」とは重力によらずに下降する力をさすが、両者をむすびつけるのは想像力の停止または収縮する力、す

なわち「真空」である。重力に逆らい、真空が生まれるとき、恩寵がはたらく。しかし、恩寵がなければ重力に逆らう力もなく、真空も生まれない。かくて逆説が生まれる。「恩寵は充たす。ただし、恩寵を迎えられる真空のあるところには入りこめない。かつ、この真空を生みだすのもまた恩寵である」(『重力と恩寵』32)。

卵が先か鶏が先かにも似た疑似問答だが、嘆願こそが人間にふさわしい、とヴェイユは説く。「神的な諸価値を自身の魂へと転移させる試み」、つまり「内的な真空」への耐性だからである(『重力と恩寵』11)。

第2回 信仰と、母娘——青年期を迎えた娘と母親の関係——

久保田 桂子(発達心理学・本学心理学科非常勤講師)

他の哺乳類動物とは異なり、人間の親子関係は子が自立したあとも一方が死ぬまで形を変えながら生涯続いていくという特徴をもつ。中でも「すべての母娘関係が問題を抱えているというわけではないが、ひとたびこじれると、きわめて錯綜した愛憎関係の温床となることは間違いない(斎藤、2008)」といわれていることから分かるように、人間の母親と娘の関係は特殊さを秘めている。宗教や哲学の中でも「母娘関係」については様々な角度から語られている。本講義では、心理学の視点を中心に青年期を迎えた娘と母親の関係について紐解いてきたい。

第3回 信仰と、教父——ギリシア・ローマの哲学とキリスト教の関係——

山田 庄太郎（初期ラテン教父学…本学哲学科専任講師）

紀元一世紀、ローマ帝国ユダヤ属州にイエスをキリストと信じる人々の共同体が登場する。この新たな共同体はその後ローマ全土に広がり、四世紀には帝国唯一の公認宗教となった。キリスト教はその揺籃の時代を、ローマという一つの社会的・文化的コンテクストの中で過ごしたのである。

後の正統信仰の基礎を築いた教父たちの思索も、こうした社会的・文化的コンテクストと無縁ではない。東方の密儀宗教との形態的類似性をもったキリスト教は、その拡大の過程において、ローマの知識人からの批判に直面することになる。迷信と宗教とを峻別し、前者を退けるキケロ（『占いについて』272.148）の態度に特徴的に認められるように、ローマの知識人には宗教をできるだけ合理的に捉えようとする傾向が認められる。実際、二世紀末のガレノスやケルソスによるキリスト教徒への批判は、キリスト教信仰が理性的な論拠を欠いているというまさにその点にあったのである。

信仰を異にする他者に、自らの教えの妥当性、正当性を示すにはどうすればよいのか。教父たちはこの課題に対し、地中海世界の共通言語としてのギリシア・ローマの哲学の伝統を採用することで応えた。当然キリスト教

徒たちの間には、ヘレニズムの伝統を受け入れることに対する警戒の念も存在し、ヘレニズム哲学の受容をグノーシス派や異端の発生と結び付ける者もいた。しかし、「アテネとエルサレムに何の関係があるのか」（『異端者への抗弁』16）と述べ、ヘレニズム哲学に対して否定的な態度をとったとされるテルトゥリアヌスさえ、自らの信仰を説明する際に、積極的にストア哲学の諸概念を用いているのである。

アレクサンドリアのクレメンスは、より積極的に、哲学を信仰のための有益な道具として位置付けている（『ストロマテイス』1:5:1:6:9:10）。クレメンスのこの姿勢は後の教父たちに基本的な方向性を与えた。教父たちは、ギリシア・ローマの哲学の諸概念を、時にキリスト教的に改変を加えながら、批判的に摂取し、自らの信仰を言語によって表現していく。我々はここに教父思想のダイナミズムを認めるのである。

第4回 信仰と、進歩——ベルクソン哲学における「揺れ」の発展的機能について——

磯部 悠紀子（現代フランス哲学・本学哲学科非常勤講師）

ベルクソンの哲学には、「揺れ」という言葉、特に原語で *oscillation* と表記される「揺れ」が、ある一貫性のもとに用いられる傾向が四つの主著を通して存在しているように思われる。これまでの論者の多くは、現代物理学に対するベルクソン哲学の影響の大きさを論じる文脈で「揺れ」を取りあげることにはあるものの、言葉の与え

る即物的な印象がベルクソン哲学の適切な理解を妨げるおそれがあるという理由で建設的な解釈を避けてきた。だが各著作を通覧してみると、とりわけ *oscillation* と表記される「揺れ」が出現する箇所の中には、むしろベルクソン哲学の理解を促す解釈が可能なのではないかと思われるものもあり、「揺れ」の全容が必ずしも明らかになっているとはいえない。

そこで本稿は、特に *oscillation* と表記される「揺れ」がベルクソンの四つの主著を通して持ちうる一貫性の解明を試みる。具体的には、「揺れ」の積極的な解釈を行っている一つの研究を手がかりに、ベルクソン哲学の中心的概念である「持続」に込められた生成のニュアンスを表現する役割を「揺れ」に見出したい。というのも、その研究は「揺れ」に対して、「持続」に通じる資質を持つ萌芽的な概念性を読み取るとともに、それがベルクソン哲学の展開に沿って生成変化する概念であることを示唆しているからである。この先行研究は四つの主著すべてを参照しているわけではないが、成長する概念という主張が妥当であるなら、同様のことが、それらすべてを通じて一貫性のもとで確認されるものと推測される。

以上の経緯により本稿では、*oscillation* と表記される「揺れ」が出現する箇所を、ベルクソンの四つの主著、すなわち『意識に直接与えられたものについての試論』、『物質と記憶』、『道徳と宗教の二源泉』から順に一つずつ取り出し、想定される一貫性の存在を検証していきたい。

第5回 信仰と、救済——光源氏は救われたのか——

倉持 長子（中古・中世日本文学・聖心女子大学 非常勤講師）

『源氏物語』における宗教的救済は、物語が抱え込んだ中心的主題でありながら、どの登場人物にももたらされることのない「ほとんど絶望的な課題」（張龍妹『源氏物語の救済』序）である。一方、亡霊の供養や成仏などの宗教的救済を目的とする中世の能は、光源氏をはじめとして救われずにいた物語中の人物たちをシテに設定し、源氏物（源氏能）の作品群を次々に生み出していった。

本講座では、まず物語の主人公光源氏の宗教的救済に関わる叙述を振り返りつつ、中世において光源氏の亡霊をシテとし、その観音の化身としての姿を描く能（須磨源氏）の詞章を味読した。『源氏物語』における須磨は「青鈍」の衣装に身を包み、精進潔斎に励む清らかな光源氏の姿を刻む地であった。こうした光源氏の姿が、「童男」という中世の宗教的枠組みによって捉え直されることで、〈須磨源氏〉のシテ光源氏は造型されたと考えられる。

次に、院政期の源氏文化の一つである源氏供養を舞台化した能〈源氏供養〉における光源氏の回向の様相について考察した。〈源氏供養〉は『源氏供養草子』およびその中で読み上げられる「源氏物語表白」を取り込んで成り立つが、作者紫式部がシテとなり、光源氏の供養を怠った罪のために成仏ができないとする点、『源氏物語』起筆伝承のある石山寺に供養の場が設定され、同時に紫式部が石山観音の化身とされている点、シテ紫式部

とワキ安居院法印とが濃密に心を通わせつつ共に源氏供養を執り行う点など、『草子』との違いも多々挙げられる。

宗教的救済の「絶望的な」あり方を見せていた『源氏物語』の登場人物たちは、源氏能においてどのような新しい救済の物語を紡いでいるのか。主人公光源氏に加え、女君たちの救済のあり方についても、作品ごとに詳細な考察が俟たれるところである。

第6回 信仰と、異端

印出 忠夫（中世フランス史…本学史学科教授）

現代とは異なって、宗教的な多様性を望ましくない事態ととらえる宗教観から、西欧古代・中世においては、「異端」とみなされた多くの人々が権力を持った教会の手によって弾圧の対象とされ、最後まで教会の権威を受入れることを拒んだ人々は処刑された。

このようにキリスト教史上において、「異端者の弾圧」は忌まわしい、繰り返されてはならない出来事のひとつと考えられる。しかしより長い歴史のスパンから考察すると、カトリック教会は異端発生の背後に潜む問題提起から学んでいたことも確かである。つまり、多くの異端的信仰とは、その時代のキリスト教信仰がはらんでい

たひとつの傾向が、時代の状況の中で極端に重視された結果生じたという一面があるのであり、それとの対決を経験した教会は、次の時代にはよりバランスの取れた新たな教義や信仰の形成をめざしたのである。

じっさい、一二世紀に出現した異端集団「カタリ派」の教義の特色は、聖書からの恣意的な引用で組み立てられた神話に基づく善悪「二元論」的世界観であるが、信仰を悪神（サタン）に対する闘争のイメージで理解すること自体は、この時代の騎士的な心性と合致するゆえに教会でも広く受入れられていたのである。しかしその後発展したトマスに代表されるスコラ学が、聖書の「字義通り」の解釈を重視した事実は、少なくとも神学のレベルにおける聖書理解が寓意的、恣意的解釈に引きずられないための警戒的な態度とも理解できる。

同じく「ワルドー派」は、一般信徒がこれまでの受身的な態度から転じ、自ら聖書を解釈し主体的に福音宣教の活動に加わろうという運動であった。聖書という「テキスト」に価値を見出すワルドー派の発生の背景には、当時の社会生活が法や契約を記録した「テキスト」に基づいて機能していた事実を広範な民衆層が認識しはじめていたという状況があった。

しかし初等教育を受ける機会さえ限定的であったこの時代の民衆の読み書き能力（リテラシー）は、一般に極めて低い水準にとどまっており、彼らに聖書を「読む」ことを許可するのは、教会当局から見てもあまりに危険だったのである。ワルドー派の問題提起に積極的な回答が示されるには、識字率が向上し人文主義が興る中、プロテスタントの出現を見た一六世紀を待たなければならなかった。